

第一章

信長の天下布武と官兵衛



## 1 黒田家のルーツから戦国という時代の気分を知る

### ▼黒田家のルーツの通説〜近江出身説〜

黒田家が江戸幕府に提出した家系図によれば、黒田氏のルーツは近江源氏・京極氏です。ピーク時には近江をはじめ六カ国を領有した室町幕府四職の家柄です。先祖に婆沙羅大名・佐々木（京極）道誉（どうよ）がいます。その庶流（分家）が近江の黒田村に住み着いて黒田姓を名乗るようになりました。

ただし、江戸時代の家系図はあてになりません。徳川家からして、新田義貞の末裔と称しているくらいで、家系図の多くは創作です。身分秩序が崩れた戦国時代に成り上がった家ばかりですから、粉飾して体裁を整えたのでしょう。ですから、江戸時代の大名家のルーツをたどること、それ自体に筆者は意味を感じません。しかし、成り上がりの経緯を追うことで戦国という時代の気分を体感できます。官兵衛のルーツを追ってみましょう。

通説では官兵衛誕生の三五年前、近江の国を追われた官兵衛の曾祖父・高政は備前・福岡に住み着きます。親戚の縁を頼ったようです。当時の福岡は福岡千軒と呼ばれて栄えた商業の町です。「千軒」とはたくさんさんの家が軒を連ねて栄えていることを示します。つまり、都市です。福岡千軒は吉井川の商港です。となり村が刀の名産地の長船（おさふね）。上流でとれる砂鉄を

福岡で水揚げし、長船で製鉄し、刀をつくります。そして、福岡から出荷します。陶器の備前焼の積み出し港でもありました。山陽道有数の商都です。

流浪の黒田氏は豊かな都市で何かしら生活の糧が得られると考えたのでしよう。後に、官兵衛・長政父子が筑前五二万石を得て築城するとき、その居城地名を福岡から福岡に改名します。黒田家ゆかりの地として思い入れがあつたからといわれます。ただし、備前福岡で黒田氏によいことが起こつたとの記録はありません。

江戸時代のベストセラー『養生訓』。現代では「接して漏らさず」ばかりが有名で閩房術の本と誤解する向きがありますが、健康長寿を説く古典名著です。著者は貝原益軒。儒学者であり、医学者です。生物学者、農学者としても名高い益軒が、著述に専念するようになったのは七〇歳を超えてからだというから驚きます。よほど養生したのでしよう。では、それまでは何をやっていたのかというと、福岡藩士です。筑前黒田家の公式記録『黒田家譜』の編纂をしています。

『黒田家譜』によれば官兵衛の祖父・重隆のとき、黒田氏は播磨・姫路に移ります。その後、重隆は息子を御着城主・小寺政職に任せさせます。小寺政職は息子をおおいに気に入り、小寺家の親戚の明石家の姫を自分の養女にして嫁がせます。政職の名乗りの一字「職」を与え、職隆もとたかと名乗らせ、小寺姓も与えます。これが小寺職隆、すなわち官兵衛の父親です。小寺家の支城である姫路城も与えます。小寺の一門待遇の筆頭家老格です(図表1-1)



説では黒田氏と備前福岡は無関係としています。筑前福岡改名を備前福岡由来とするのは貝原益軒の創作であり、真の由来は不明という。謎は残ります。

一方、近江出身の黒田氏が播磨に流れてきて目薬屋となって基盤を築いたという俗説もあります。明治初期に金子堅太郎が書いた『黒田如水伝』では、黒田氏は備前福岡から播磨姫路に移住し、目薬屋となり、稼いだ金で勢力を拡大していったとしています。金子堅太郎とは伊藤博文の側近として明治時代に活躍した大政治家です。日露戦争の講和を米国のセオドア・ルーズベルト大統領に仲介させる交渉を成し遂げたことで知られます。なぜ、大政治家が官兵衛のことを著述したのかというと、金子が福岡藩士だったからでしょう。

目薬屋うんぬんは金子が江戸時代に書いた『夢幻物語』を引用したものです。しかし、同書は今日、歴史資料としての価値はないとされています。『黒田家譜』にもそのような記載はありません。したがって、通説では否定されています。しかし、油商人から一国の大大名にのしあがった齋藤道三（信長の舅。近年の研究で道三と父の二代で商人から大名になった説が有力）がいるように、既存の秩序が崩れ混沌とする戦国という時代の気分を表わす面白い説ではあります。司馬遼太郎は官兵衛を主人公とした小説『播磨灘物語』で、目薬屋説を書いています。かいつまんで紹介しましょう。

備前福岡を追われた官兵衛の祖父重隆は家族を連れた旅の途中、姫路の百姓の竹森新右衛門の小作人小屋に滞在していました。ある日、新右衛門の奨めで重隆は広峯神社へ行きま

す。新右衛門は同社の有力な信徒でした。参拝や宿泊の世話をする御師おしと雑談となります。御師は重隆に問います。

「私どもは、播州および近隣の国々に神符しんぷを配って歩きます。そのとき薬の一つも添えてくれば百姓もたすかるのでござるが、黒田どのの御家には家伝の薬はござらぬか」

司馬遼太郎 『播磨灘物語』

それならば目薬がござると重隆は答えます。黒田氏の出身地である北近江に伝わる薬です。その名もメグスリノキというカエデ科の樹木の樹皮を煎じてつくるものです。こうして、重隆は目薬をつくり、広峯神社の御師が神符とともに売り歩くこととなります。「玲珠れいしゅ膏こう」と名づけられた目薬はよく売れて、黒田氏は財をなしました。

新右衛門は重隆の将来性に向け、母屋を重隆に譲り、自分が小作人小屋へ移ります。黒田家の家臣になったのです。この財を重隆は近在の百姓に無担保低利で貸します。月二日は屋敷の仕事を手伝いに来ることを条件にして。こうして重隆は家臣を増やしていきます。数年で二百人の家臣団ができました。

ここまでの規模となった後、黒田家は御着城主・小寺政職に仕えることにします。播磨中部では最大の勢力（といっても動員力二〇〇〇〜三〇〇〇程度、一〇万石相当）の小寺氏で